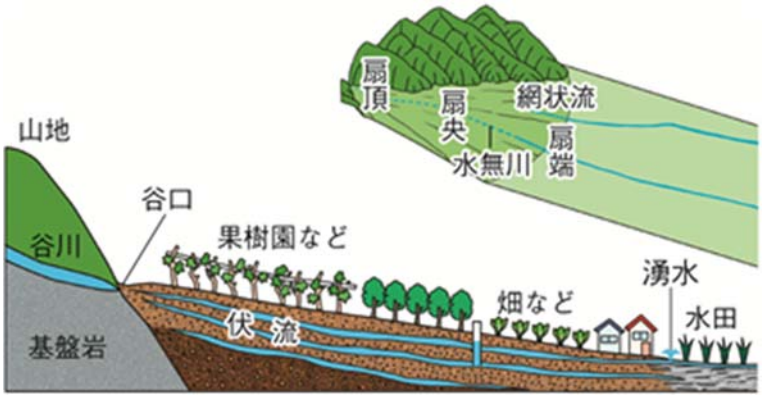
浦高の地理 2020　No.30
小地形②　沖積平野の土地利用　教pp.36-38　資pp.41-43

MEMO

扇状地の土地利用

【集落は、生活のために必要な物資と安全性とを確保できる場所に形成される。】



・[扇頂]＝[①　　]の形成。

【課題1】なぜ集落が成立するのか？

・[扇央]＝畑・果樹園に利用。

【課題2】なぜ集落が立地しないのか？

【課題3】なぜ水田にならないのか？

〇近年は宅地化も進むが、戦前は桑畑が多かった。例外的に水田がみられることもある（例：富山県砺波平野）。

〇地形としては、[②　　]が見られるところもある。

・[扇端]＝集落や水田はここに成立する。

【課題4】集落や水田が立地する理由は？

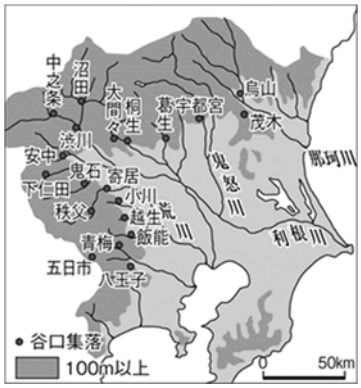
氾濫原の土地利用

・[自然堤防]＝集落、畑として利用される。

【課題5】なぜ平野でありながら水田に利用されないのか？

・[後背湿地]＝主に[③　　]に利用されてきた。地盤は軟弱であるが、近年都市近郊では、宅地開発や公共施設の建設がみられる。

谷口集落から発達した都市の例
（関東地方）



山からは薪・木炭・繭等、平野からは米・塩・魚等が運ばれた。

天井川＝堤防により河道の固定化をはかると、砂礫の供給がさかんな河道では堤防内での堆積が進行して河床が高くなり、ふたたび氾濫の危険が増す。これを防ぐために堤防を高くすると、さらに河床が高くなる。こうした繰り返しにより、河床面が周辺平野面より高くなった河川をいう。旧草津川など。

浦高の地理 2020　No.31
小地形③　台地と丘陵　教pp.38-39,185　資pp.41, 43-44

MEMO

台地と丘陵

・台地：隆起扇状地、隆起三角州、[①　　]、[②　　]など。

高さ 2～3m から数十 m の崖に囲まれた地形。更新世に形成された三角州や扇状地が隆起したもの。水を得にくいため、日本では主に江戸時代の[③　　]以降に開墾開発が進んだ。河川により削られた低地（谷戸、谷津、谷地などと呼ばれた）は水田となった。近年は都市化が進む。

※[①　　]：河川の流路に沿う階段状地形で、氾濫原よりも高い位置にあるものを段丘と呼ぶ。
(形成過程は資料集 p.44)

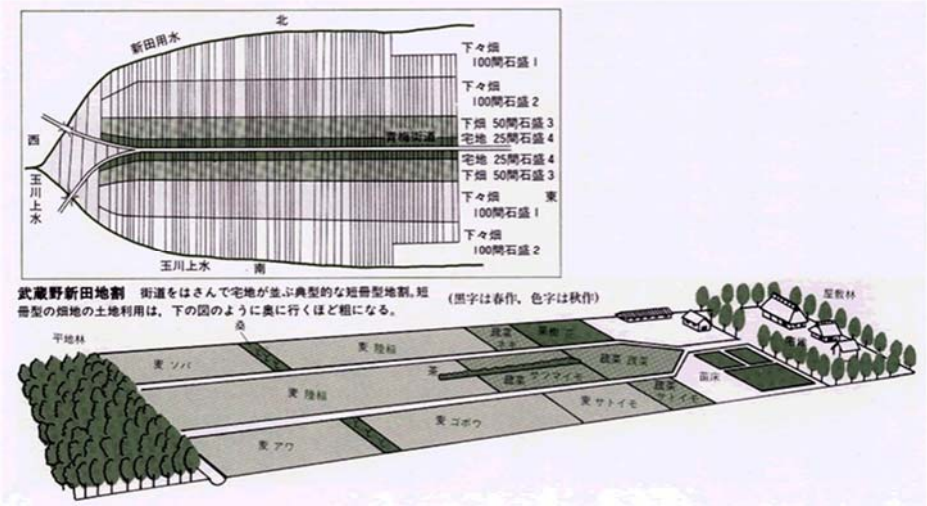
ア：山間部において氾濫原が形成される。
イ：河川の下方侵食が進む（土地が隆起する地域で顕著）。
ウ：新たに標高が低い氾濫原が形成され、前段階での氾濫原は段丘面となる。
エ：この作用が繰り返され、段丘は河川の両側に数段にもおよび形成される。時代を異にする段丘面の境となる崖を段丘崖と呼ぶ。

・丘陵：山地よりも起伏の小さな高まりとその集合。

台地・低地の周囲や山地の前縁に位置することが多い。起伏量は 300～250m 程度。関東平野では西部の台地と山地の境に見られる。武蔵野台地の中に見られるのは、狭山丘陵。

台地の縁（へり、崖下）では水を得やすいため集落ができやすい。台地上では、浅い井戸から水（宙水）が得られる場合に集落が形成される。

江戸時代の[③　　]の例(所沢市・三芳町「三富新田」)



三富新田は、1694（元禄7）～96(元禄 9)年に川越城主の柳沢吉保により開拓された畑作新田集落である。**短冊型の地割りが現在もほぼ継承され、地割りそのものが文化財の指定を受けている**。道路側から屋敷・五町歩の畑地・平地林と配置し、畑地は一人一日分の労働可能な面積とされた五畝（5アール）単位に細分された。

屋敷林には、竹、ケヤキ、カシ、スギ、ヒノキなどが植えられ、空っ風を防ぐためだけでなく、日常生活に利用された。

平地林は、コナラやクヌギなどの雑木林で、薪炭や堆肥の供給源として重要であった。このあたりの土壌は関東ローム層を母材とし、やせていたので、平地林の落ち葉からつくる堆肥は特に重要で、平地林の管理は欠かせない作業であった。

都市近郊の緑地をはじめとする自然環境の保全は、多くの都市住民が望むところである。また堆肥の利用により農薬や化学肥料の使用を減らし、安全な農作物を供給する三富新田のシステムは今日、再評価されている。